

ひきこもり支援の新たな展開をめざして

【研究課題】 思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と
精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究

齊藤 万比古

国立国際医療センター国府台病院 第二病棟部 部長

本発表会は平成 19～21 年度の 3 年間にわたった厚労科研障害者対策総合研究事業による「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究」の成果である「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン（案）」の概要とその背景となった考え方を広く周知してもらうことを目的に開催しました。

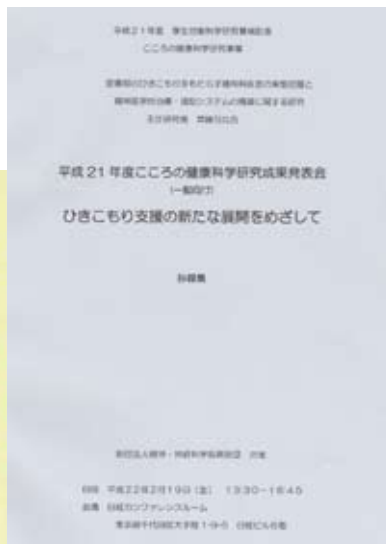
◇この新たなひきこもりガイドライン（案）への関心は高く、NHK の報道部、週刊朝日のライター、出版社 2 社などの担当者が取材に訪れ、開催日夕刻の NHK ニュースで報道されました。

◇訪問型の指導には期待が集まっていますが、本発表会ではその効果を評価するとともに、実施にあたっては繊細な配慮が必須であり、慎重な準備と評価を前提とした支援法であることを明確にすることができました。

◇ひきこもりはメンタルヘルスの問題であり、支援にあたっては社会的支援とともに精神障害の存在にも対応した包括的なものとなるべきであることを調査結果などとともに示し、ガイドライン（案）では多軸的・総合的な評価の重要性について伝達できました。

◇大学生の間にもひきこもりが生じることを本研究は明らかにし、いくつかの大学での特異な取り組みを複数のモデルとして伝えることができました。多くの大学での積極的な取り組みを促す効果が期待できます。

◇以上のような成果を組み込んだガイドライン（案）の骨子を紹介することで、内容への共感とともに、早急な公開を望む声が支援機関の職員からも、家族や当事者からも上がりました。



会場の様子

(平成 22 年 2 月 19 日 (金) 日経カンファレンスルームにて)